

東京薬科大学所蔵の先哲遺墨

小曾戸 洋

東京薬科大学

東京薬科大学は日本で最も古い歴史をもつ私立薬学校である。明治13年(1880)藤田正方(1846)によって開設された私立東京薬舗学校がその端緒であった。明治16年には東京薬学校と改称したが、明治19年に藤田が急逝。大井玄洞・山田薫・熊沢善庵が校長を交替後まもなく明治21年、東京薬学校は薬学講習所と合併して私立薬学校と称し、下山順一郎(1853~1912)が初代校長となった。明治33年(1900)には私立東京薬学校と改称。大正6年(1917)、私立東京薬学校は東京薬学専門学校に昇格し、丹波敬三(1854~1927)が初代校長に就任した。戦後の昭和24年(1949)東京薬学専門学校は東京薬科大学となり、今日に至っている。

近代日本薬学の祖とされる長井長義(1845~1929)は大学東校(東大医学部)からドイツのベルリン大学に留学し、明治17年(1884)に帰国。翌18年には麻黄から有効成分エフェドリンを抽出するなど数々の業績を挙げ、明治21年には日本薬学会の初代会頭に就任し、昭和4年に没するまで42年間会頭を務め、日本の薬学界を牽引した。

山下順一郎・丹波敬三・丹羽藤吉郎(1856~1930)の3人は、明治11年に東京大学医学校製薬学科の第1回生として卒業した同級生であった。東大製薬学科では、下山が生薬学を、丹波が衛生・裁判化学を、長井が薬化学を担当した。下山らは医学博士号の享受を拒否して、明治32年、長井・下山・丹波らは日本初の薬学博士の称号を得、薬学の専門性を貫いた。丹羽藤吉郎も薬剤師・薬局の独自性を主張し、医薬分業運動に精力を注いだ。丹羽は下山・丹波のあとを承け、大正3年に日本薬剤師会長に就任した。

長井や丹羽は、下山・丹波らの東京薬学校~東京薬学専門学校の運動を後押しし、顧問として多忙の中、足繁く会合に出席した。あくなき薬学への情熱が彼らを結束させたのである。下山・丹羽の教え子である池口慶三(1867~1933)も薬剤師の地位確立に尽力し、東京薬学専門学校の校長として奮闘した。あとを承けた村山義温(1883~1980)は戦前は熊本薬学専門学校校長として、戦後は東京薬科大学校長として薬学教育に挺身した。

平成28年、東京薬科大学に史料館が開設され、未公開の史料が整理されつつある。その中には日本近代薬学の泰斗の遺墨も含まれている。以下はその例である。

長井長義書。①「終始一誠意，丁卯新年試筆，八十三翁朴堂^理学博士^薬学博士^{長井長義}撰堂」②「^{家山在青}安善養徳性，丁卯新年試筆八十三翁朴堂学人^印 ^印」③「君思等天地，丁卯新年試筆，八十三翁朴堂学人^印 ^印」(①~③いずれも絹本)。

丹波敬三書。①「^{淡齋}勉勤成功基，大正乙丑夏日，応高田兄囑，淡齋老人^{正三位勲一等薬学博士}
^{丹波敬三}」②「^印和気致祥，淡齋老人^印 ^印」③「^印心広體胖，七十三劬叟，淡齋老人^印 ^印」
④「^{醍醐味}延寿万歳，正三位勲一等薬学博士^印 ^印」(①~③いずれも絹本)。

池口慶三書。「英気，慶三書」(紙本)。